

# 今後100年へ 技術者「神業」

## 阿蘇神社

### よみがえる神域

①

2023.12.3



阿蘇神社楼門の復旧で中心的な役割を果たした文化財建造物保存技術協会の大川畑博文所長（左）と谷口征雅技術職員＝11月20日、阿蘇市

熊本地震の本震で倒壊した阿蘇神社の楼門。2016年4月16日、阿蘇市



11月中旬、阿蘇市一の宮町の阿蘇神社。2016年の熊本地震で倒壊した九州最大級の楼門は復旧をほぼ終え、江戸後期の社寺建築の粋を集めた威容を取り戻していた。目を回すと、中央部には楼門を支える4本の鋼管柱が立ち、再利用された柱には新材との継ぎ目がはつきりと見える。「再建できるか不安もあったが、ようやくこまできた」。設計と工事監理を担った文化財建造物保存技術協会（文建協、東京）の現場トップ、大川畑博

## 楼門復旧 部材の大半を再利用

# 文化財と耐震 両立に苦心

文さん(54)は、文化財の価値保全と耐震補強の両立で苦心した日々を振り返る。

楼門は国指定重要文化財で、復旧ではできるだけ多くの部材を再利用し、元通りの姿に戻さなくてはならない。さらに熊本地震と同程度の揺れでも崩れない耐震性も求められた。通常、耐震補強の設計は建物を見ながら考えるが、「楼門は倒壊した状態からのスタート。調査で記録した図面や写真しか判断材料がなかった」と大川畑さん。

解体の際には部材ごとの位置を手書きした伏図（上から見た平面図）220枚を基に、木材と干渉しないように鋼管柱や鋼材を通す位置を決定。大川畑さんは「鋼管柱の位置が1・5センチでもずれば工事がやり直しになるほどの綿密な設計図になった」と話す。施工業者の腕が試されたが、鋼管柱の位置は正確で「まさに神業だった」。



アラミドロッド継  
楼門に加工した特殊繊維  
再利用材

阿蘇神社楼門の復旧で採用された技術

## ズーム

阿蘇神社 健甕龍命（たけいわたつのみこと）とその家族神をまつり、2千年以上の歴史を持つとされる。火山信仰と融合しながら県内外の信仰を集めてきた。1835〜50年にかけて建てられた楼門と三つ子の神殿。二つの門は2007年、国の重要文化財に指定された。楼門は高さ約18.5メートル、日本3大楼門の一つ。16年4月16日の熊本地震本震で国重文6棟のほか、拝殿や扉などが被災した。復旧の総工費は約25億円。

文建協は大きく3パターンの耐震補強案の中から、地面に固定した4本の鋼管柱と鋼材、ダンパーを組み合わせた骨組みを楼門の内側に築き、木材にかかる揺れの衝撃を吸収する工法を採用した。

このほか細かい部材も損傷部分を削り取って新材と接合する

熊本地震で倒壊した阿蘇神社楼門が復旧工事を終え、7日に「竣工祭」を迎える。これに被災した主要社殿の復旧は完了し、神域がよみがえった。震災から7年8カ月の間、神社の復興を目指した技術者と神職らの軌跡をたどる。

大川畑さんは「楼門の文化財としての価値を高める資料が多数見つかった。今後100年以上立ち続けて地元可愛される存在でいてほしい」と願う。

（小田喜一）